

# 水稻病害虫防除対策（8月）

## 1 いもち病（穂いもち）

- (1) 7月上旬の調査では、県内での葉いもちの発生ほ場割合は平年より低くなりました。
- (2) 上位葉に葉いもちの病斑が認められるほ場では、早急に散布剤による防除を行ってください。
- (3) 散布剤による穂いもち防除を実施する場合は、穂ばらみ末期と穂揃期の2回散布を基本に実施してください（表1、3）。その後多発するおそれがある場合は、さらに傾穂期に追加散布を行ってください。
- (4) 水面施用剤による穂いもち防除を実施する場合は、各薬剤の施用適期を逃さずに施用してください（表2）。
- (5) 薬剤防除の実施に当たっては、以下のことに注意してください。
  - ア 耐性菌の出現を防ぐため、同じ系統の薬剤の連用はさけてください。特にQoI剤（FRAC:11）は、県内でも耐性菌の発生が確認されています。QoI剤の使用は育苗箱施用薬剤を含めて年1回までとしてください。
  - イ 水面施用剤は湛水状態にして所定量を均一に施用してください。施用後は7日以上止水状態を保ち、落水や掛け流しは行わないでください。
  - ウ アミスターエイトはリンゴの一部品種に葉害を発生させる場合があるため、リンゴにかからないよう注意してください。
  - オ ビームゾルやビームバリダゾルは野菜類の幼苗、ナシ、キクにかからないよう注意してください。
  - エ パック剤やジャンボ剤は藻や浮草で拡散が阻害される場合は使用をさけてください。

表1 いもち病（穂いもち）の防除薬剤（茎葉散布剤）

薬剤名	有効成分名	FRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり使用量	本剤の使用 回数
アミスターエイト	アズキシストロビン	11	収穫14日前まで	1,000~1,500倍	3回以内
カスミン液剤	カスガマイシン	24	穂揃期まで	1,000倍	2回以内
ノンブラス粉剤DL	トリシクラゾール	16.1	収穫7日前まで	3~4kg	2回以内
	フェリムゾン	U14			
ノンブラスフロアブル	トリシクラゾール	16.1	収穫7日前まで	1,000倍	2回以内
	フェリムゾン	U14			
ビームゾル	トリシクラゾール	16.1	収穫7日前まで	1,000倍	3回以内
フジワン乳剤	イソプロチオラン	6	収穫14日前まで	1,000倍	2回以内
ブラシン粉剤DL	フェリムゾン	U14	収穫7日前まで	3~4kg	2回以内
	フサライド	16.1			
ブラシンフロアブル	フェリムゾン	U14	収穫7日前まで	1,000倍	2回以内
	フサライド	16.1			

注1) 液剤、乳剤、フロアブル剤は10a当たり140~150L散布する。

注2) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

表2 穂いもちの防除薬剤（水面施用剤）

薬剤名	有効成分名	FRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	10a 当たり使用量	本剤の 使用回数
コラトップ粒剤 5	ピロキロン	16.1	出穂 15～10 日前	3～4 kg	2 回以内
コラトップ 1キロ粒剤 12	ピロキロン	16.1	出穂 15～10 日前	1～1.5kg	2 回以内
コラトップ ジャンボ P	ピロキロン	16.1	出穂 15～10 日前	小包装（バッグ） 10～13 個（500～ 650g）	2 回以内
フジワ ン 粒 剤	イソプロチオラン	6	出穂 10～30 日前 (収穫 30 日前まで)	3～5 kg	2 回以内

注1) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。  
注2) 試験研究の成果等に基づき、効果的な使用方法として使用条件を限定した部分には下線を付した。

表3 いもち病（穂いもち）の防除薬剤（無人航空機散布）

薬剤名	有効成分名	FRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり使用量	本剤の使用 回数
アミスターエイト*	アズキシストロビン	11	収穫 14 日前まで	8 倍 0.8L	3 回以内
ビームゾル	トリシクラゾール	16.1	収穫 7 日前まで	6～8 倍 0.8L	3 回以内
ビームバリダゾル*	トリシクラゾール	16.1	収穫 14 日前まで	8 倍 0.8L	3 回以内
	バリダマイシン	U18			
フジワ ン 乳 剤	イソプロチオラン	6	収穫 14 日前まで	8 倍 0.8L	2 回以内
ブラシンゾル	フェリムゾン	U14	収穫 7 日前まで	8 倍 0.8L	2 回以内
	フサライド	16.1			
オリゼメート粒剤 20	プロベナゾール	P02	収穫 14 日前まで	1 kg	2 回以内
コラトップ粒剤 24	ピロキロン	16.1	出穂 30～5 日前	0.5 kg	2 回以内
コラトップ 1キロ粒剤 12	ピロキロン	16.1	出穂 30～5 日前	1 kg	2 回以内

注1) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。  
注2) \*は紋枯病との同時防除に使用できる薬剤を表す。

## 2 紋枯病

- (1) 今後も高温が続く見込みのため、病斑が認められるほ場や常発ほ場では上位葉鞘に伸展して被害が大きくなるおそれがあります。多発の兆候がみられた場合は、穂揃期に散布剤を使用してください。
- (2) 水面施用剤による防除を実施する場合は、各薬剤の施用適期を逃さずに施用してください（表4）。
- (3) 散布剤による防除は、上位葉鞘へ伸展する前の穂ばらみ期に実施してください。その後多発するおそれがある場合は、穂揃期に追加散布を行ってください（表4）。
- (4) アミスターエイトはリンゴの一部品種に葉害を発生させる場合があるため、リンゴにかからないよう注意してください。

表4 紋枯病の防除薬剤

剤型	薬剤名	有効成分名	FRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	10a 当たり使用 量	本剤の 使用回数
水面 施用剤	モンガリット粒剤	シメコナゾール	3	出穂 28～14 日前	3～4 kg	2 回以内
	リンパー粒剤	フラメトピル	7	出穂 30～10 日前	3～4 kg	2 回以内
散布剤	アミスターエイト	アズキシストロビン	11	収穫 14 日前まで	1,000～1,500 倍	3 回以内
	バリダシン液剤 5	バリダマイシン	U18	収穫 14 日前まで	1,000 倍	5 回以内
	モンカットファイン 粉剤 20DL	フルトラニル	7	収穫 14 日前まで	3～4 kg	4 回以内

注1) 液剤、フロアブル剤は10a当たり140～150L散布する。  
注2) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。  
注3) 試験研究の成果等に基づき、効果的な使用方法として使用条件を限定した部分には下線を付した。

### 3 ごま葉枯病

- (1) 砂質土壌水田等では、肥料分の流亡により、生育後半に肥料切れとなって発生しやすくなります。深耕、堆きゅう肥、客土、ケイカルの施用等によって地力の増進を図ってください。
- (2) 最高分けつ期頃から病斑が確認され始め、穂ばらみ期頃から急激に進展します。出穂後は穂首や枝梗にも病斑を形成しますが、穂いもちのように白穂になることはありません。多発すると上位葉が枯れあがり、穂枯れ症状となって収量の充実に悪くなり、茶米などを生じて減収の要因になります。
- (3) 穂枯れの発生が懸念される場合は、穂揃期と傾穂期に散布剤で防除を行ってください（表5）。

表5 ごま葉枯病の防除薬剤

薬剤名	有効成分名	FRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり使用量	本剤の 使用回数
アミスターエイト	アゾキシストロピン	11	収穫14日前まで	1,000～1,500倍	3回以内
ノンブラス粉剤DL	トリシクラゾール	16.1	収穫7日前まで	3～4kg	2回以内
	フェリムゾン	U14			
ノンブラスフロアブル	トリシクラゾール	16.1	収穫7日前まで	1,000倍	2回以内
	フェリムゾン	U14			
ブラシン粉剤DL	フェリムゾン	U14	収穫7日前まで	3～4kg	2回以内
	フサライド	16.1			
ブラシンフロアブル	フェリムゾン	U14	収穫7日前まで	1,000倍	2回以内
	フサライド	16.1			

注) フロアブル剤は10a当たり140～150L散布する。

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

### 4 変色米

- (1) 腹黒米（アルタナリア菌）は玄米の腹側に黒褐色の病斑がみられ、夏期高温の年に発生が多くなります。
- (2) 紅変米（エピコッカム菌）は玄米の表面に紅色の斑点を生じます。出穂後低温の年に発生が多くなります。
- (3) 褐色米（カーブラリア菌）は玄米の表面が褐色になり、黒褐色の微斑点を生じる場合があります。高温、乾燥、強風などによって抵抗力の低下したイネにみられます。
- (4) 適切な施肥を行い、早期に枯れあがるような管理は行わないでください。また、収穫後は速やかな乾燥・調製を心がけてください。
- (5) 散布剤を使用する場合は、穂ばらみ期～穂揃期に散布してください（表6）。

表6 変色米の防除薬剤

薬剤名	有効成分名	FRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、 10a 当たり 使用量	本剤の 使用回数	対象		
						アルタ ナリア	エピコ ッカム	カーブ ラリア
ノンプラス 粉剤 DL	トリシクラ ゾール	16.1	収穫7日前まで	3～4kg	2回以内			○
	フェリムゾン	U14						
ノンプラス フロアブル	トリシクラ ゾール	16.1	収穫7日前まで	1,000倍	2回以内	○	○	○
	フェリムゾン	U14						
ブラシン 粉剤 DL	フェリムゾン	U14	収穫7日前まで	3～4kg	2回以内		○	○
	フサライド	16.1						
ブラシン フロアブル	フェリムゾン	U14	収穫7日前まで	1,000倍	2回以内	○	○	○
	フサライド	16.1						

注) フロアブル剤は10a 当たり 140～150L 散布する。

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

## 5 斑点米カメムシ類

- (1) 7月上旬の畦畔すくい取り調査では、発生地点割合は平年より高く、アカスジカスミカメの1地点当たりすくい取り数が平年より多くなりました。また、今後も高温となる見込みで、水田周辺の密度の増加や活動の活発化により、被害が増えるおそれがあります。
- (2) 県内では、全域でアカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ、ホソハリカメムシ、浜通り全域及び中通りの一部でクモヘリカメムシが主に発生しています。
- (3) 畦畔雑草での斑点米カメムシ類の生息数を減らすことで、出穂後の水田内への侵入数を少なくすることができるため、畦畔雑草の草刈を励行してください。ただし、出穂直前に草刈を行うとかわたって斑点米カメムシ類を水田内に追い込んでしまうため、草刈は出穂10日前までに完了してください。
- (4) 斑点米カメムシ類は、イネが出穂すると水田に侵入するため、出穂時期が周囲と比べて早い水田に被害が集中しやすくなります。早生品種や移植時期が周囲と比べて早かったほ場では、斑点米カメムシ類の侵入に注意し、出穂期以降に水田で発生がみられる場合は、薬剤防除を行ってください。
- (5) 散布剤による防除は、加害種がカスミカメムシ類（アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ）の場合は、乳熟期（出穂期の7～10日後）に1回、その7日後頃に1回の2回散布を基本とします（表7、9）。クモヘリカメムシの場合は、出穂期から穂揃期に1回、その10日後頃に1回の2回散布を基本とします。
- (6) 水面施用剤を使用する場合は、穂揃期～乳熟期に湛水状態で散布し、7日以上止水してください（表8）。その後多発が予想される場合は、散布剤により追加防除を行いましょう。
- (7) 水面施用剤はクモヘリカメムシ等の大型のカメムシに対しては防除効果が劣ることがあるので、液剤や粉剤を使用しまししょう。

表7 カメムシ類の防除薬剤（茎葉散布剤）

薬剤名	有効成分名	IRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり使用量	本剤の使用 回数
アルバリン粉剤DL	ジノテフラン	4A	収穫7日前まで	3kg	3回以内
エクシードフロアブル	スルホキサフロル	4C	収穫7日前まで	2,000倍	3回以内
キラップフロアブル	エチプロール	2B	収穫14日前まで	1,000~2,000倍	2回以内
キラップ粉剤DL	エチプロール	2B	収穫14日前まで	3~4kg	2回以内
スタークル液剤10	ジノテフラン	4A	収穫7日前まで	1,000倍	3回以内
スタークル粉剤DL	ジノテフラン	4A	収穫7日前まで	3kg	3回以内
スミチオン乳剤	M E P	1B	収穫21日前まで	1,000倍	2回以内
スミチオン粉剤3DL	M E P	1B	収穫21日前まで	3~4kg	2回以内 (出穂前は 1回)
ダントツフロアブル	クロチアニジン	4A	収穫7日前まで	5,000倍	3回以内
ダントツ粉剤DL	クロチアニジン	4A	収穫7日前まで	3~4kg	3回以内

注1) 液剤、乳剤、フロアブル剤は10a当たり140~150L散布する。

注2) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

表8 カメムシ類の防除薬剤（水面施用剤）

薬剤名	有効成分名	IRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	10a 当たり使用量	本剤の 使用回数
アルバリン粒剤	ジノテフラン	4A	収穫7日前まで	3kg	3回以内
キラップ粒剤	エチプロール	2B	収穫14日前まで	3kg	2回以内
スタークル粒剤	ジノテフラン	4A	収穫7日前まで	3kg	3回以内
ダントツ粒剤	クロチアニジン	4A	収穫7日前まで	3~4kg	3回以内

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

表9 カメムシ類の防除薬剤（無人航空機散布）

薬剤名	有効成分名	IRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり使用量	本剤の使用 回数
エクシードフロアブル	スルホキサフロル	4C	収穫7日前まで	16倍 0.8L	3回以内
キラップフロアブル	エチプロール	2B	収穫14日前まで	8~16倍 0.8L	2回以内
スタークル液剤10	ジノテフラン	4A	収穫7日前まで	8倍 0.8L	3回以内
ダントツフロアブル	クロチアニジン	4A	収穫7日前まで	24倍 0.8L	3回以内
トレボンエアー	エトフェンプロックス	3A	収穫14日前まで	8倍 0.8L	3回以内

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

## 6 イネツトムシ（イチモンジセセリ）

- (1) 第1世代成虫が7月中旬頃に発蛾最盛期となり、イネに産卵します。第2世代幼虫は8月中旬から9月にかけてイネの葉を綴って「ツト」を作り、その中で蛹になります。
- (2) 発生が多いと止葉にツトを作る幼虫が多くなり、穂の充実が悪くなるほか、品質が低下します。
- (3) 遅く移植したほ場や直播栽培など、8月中旬以降に出穂するほ場では被害が大きくなりやすく、また、葉色の濃いほ場では発生が多くなりやすいため注意してください。
- (4) 中齢幼虫以降になるとツトが大きくなり、薬剤の防除効果が低下するため、防除は幼虫がまだ小さい8月上旬～中旬に行ってください（表10）。

表10 イネツトムシの防除薬剤

薬剤名	有効成分名	IRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり使用量	本剤の 使用回数
スミチオン乳剤	M E P	1 B	収穫21日前まで	1,000倍	2回以内

注) 乳剤は10a当たり140～150L散布する。

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

## 7 ニカメイチュウ

- (1) 第2世代成虫は、例年7月6半旬～8月1半旬頃に発蛾最盛期となります。
- (2) 第2世代幼虫の被害は白穂となるため、被害が大きいと収量に影響します。
- (3) 水面施用剤を使用する場合は、発蛾最盛期に湛水状態で施用し、7日以上止水してください。散布剤を使用する場合は発蛾最盛期の7日後までに株元によく付着するように散布してください（表11）。

表11 ニカメイチュウの防除薬剤

薬剤名	有効成分名	IRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり使用量	本剤の 使用回数
スミチオン乳剤	M E P	1 B	収穫21日前まで	800～1,000倍	2回以内
スミチオン粉剤3DL	M E P	1 B	収穫21日前まで	3～4kg	2回以内（但し、 出穂前は1回）
パダン粒剤4	カルタップ	14	収穫30日前まで	3～4kg	6回以内

注) 乳剤は10a当たり140～150L散布する。

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

## 8 セジロウンカ

- (1) 7月頃に成虫が本田に飛来し、飛来成虫からふ化した幼虫が7月下旬～8月上旬に発生盛期となります。
- (2) 出穂期に幼虫の発生が多いと、穂を吸汁するため褐変するほか、排泄物によって発生した「スス」で穂が汚れ、千粒重の減少や品質の低下をもたらします。
- (3) 薬剤防除の目安は、1株当たりの幼虫数が5～15頭です（表12）。

表12 セジロウンカの防除薬剤

薬剤名	有効成分名	IRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり使用量	本剤の 使用回数
マラソン乳剤	マラソン	1B	収穫7日前まで	2,000倍	5回以内

注) 乳剤は10a当たり140～150L散布する。

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

## 9 ツマグロヨコバイ

- (1) 本種は年4回発生しますが、出穂期から乳熟期に発生した幼虫による吸汁被害が収量に影響します。
- (2) 発生が多いと上位葉や穂を吸汁し、葉先が赤黄色に変わります。また、排泄物にすす病菌が発生し、植物体がすすで黒くなります。
- (3) 薬剤防除の目安は1株当たりの成虫と老齢幼虫の合計が10頭以上です（表13）。

表13 ツマグロヨコバイの防除薬剤

薬剤名	有効成分名	IRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり使用量	本剤の 使用回数
マラソン乳剤	マラソン	1B	収穫7日前まで	2,000倍	5回以内

注) 乳剤は10a当たり140～150L散布する。

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

※農薬の登録内容については慎重に校閲していますが、登録内容の変更は随時行われています。また、同じ農薬名でも農薬会社によって登録内容が異なることがありますので、農林水産省のホームページ (<https://pesticide.maff.go.jp/>) 等で最新の登録内容を確認してください。(記載中の登録内容は令和6年7月24日現在)